

特集：「.NET テクノロジー 価値創造サービスの適用」の発刊によせて

福島 康夫

2000年にマイクロソフト社が.NET 構想を発表してから4年半が経過した。

日本ユニシスでは、メインフレームで培われた高度な技術力を背景としつつ、UNIX や Windows など各種オープンな技術環境におけるシステム構築を手がけてきた。

しかしながらオープンプラットフォームゆえに発生する各種技術リスク、新技術の検討と追隨の判断にかかるリスクといった様々なリスクを事前検証し、BANCS システム (ES 7000 + Windows 2000 DCS) などミッションクリティカル基幹システム開発に臨む必要があった。

BANCS システムなどの構築実績から、ユニシスでは ES 7000 と Windows を基盤としたシステム構成によるミッションクリティカル基幹システムの構築が十分に可能と判断し、ミッションクリティカルシステム基盤として積極的に採用することとした。

そんな折、マイクロソフト社から.NET という概念と.NET Framework という実行・開発基盤ソフトウェアが提供された。

日本ユニシスでは.NET の持つ可能性を検討した結果、主たる技術要素として.NET を採用することとし、マイクロソフト社とも緊密な協業関係を結んだ。かつて Windows 基盤上で開発されてきた各種システムの.NET 化は言うに及ばず、新規大規模システムの構築やメインフレームで稼動しているミッションクリティカルな分野への.NET 適用事例も増加の一途をたどっている。

企業を取り巻く内外要因の変化に伴い、われわれ IT ベンダに求められる姿とシステムの形態も変化している。すなわち、従来のシステム開発では、業務効率の改善と新たなバリューチェーンの構築を実現するというシステム化要求を高い(独自の)技術力で実現することが主体となっていた。しかし現在では、ビジネス形態の多様化により飛躍的に高度化・複雑化する顧客の IT・経営課題を、オープン化技術を有効に利用し総合的に解決する能力が求められている。

また企業間の経営課題変化のスピードアップと効率化に対応するために、標準化された XML Web サービスを利用した企業システム統合、情報の再利用を含む企業間システム連携を実現できる 変更可用性の高い疎結合型システムが企業システムの基本形態となってきている。こうした要求を解決するに足る能力を提供できる基盤として、日本ユニシスでは.NET を重要な選択肢のひとつとした。

システムの本質はメインフレームでもオープン化された技術でも、変化することはない。 .NET Framework という開発・実行基盤と競合する、あるいは別の観点から構築された製品や技術はこれからも数多く登場するであろう。またシステムを開発するための技術も、種々検討され試行を経て浸透していくことが予想される。

こうした様々な技術、技法は最終的にプロジェクトで採用され、その品質・生産性の向上に

2(2)

寄与することとなる。日本ユニシスでは.NET Framework を対象としてそのプロセスを定型化し、品質・生産性の向上をプロジェクトにおいて実現し、かつそれらを糧として更なるシステム開発受託を目指しているが、このプロセスの定型化は.NET Framework 自体の進化や拡大を吸収し、効果を継続していく上で非常に重要なファクターとなる。

本特集号では、「.NET No.1 Sier」としての日本ユニシスでこれまで実施してきたノウハウ、「.NET テクノロジーを中心としてそれを応用するソリューションに関する論考」、それらの様々な活用方法を集めている。

さらには論考の随所に、上述のプロセス定型化にかかるエッセンスが盛り込まれているため、「.NET テクノロジーやソリューション」、新技術の取込みと効果の継続性に関心のある方々の参考となれば幸いである。

(日本ユニシス・ソリューション株式会社
執行役員テクノロジーサービスグループ長)